

@onaishigeo



クリスマスツ  
リーのてっぺ  
んで *yumesae areba  
ikirareruno?*

@onaishigeo

少女は泣いていた。

暗いベランダで、部屋から持ち出した毛布にくるまり泣いていた。

いっそ死んでしまおうかと考えた。

日本中が浮かれている今夜、死んだら面白いとも考えた。

しかし同時に、このまま死ぬのはとても悔しかった。

(死ヌベキナノハ ワタシデハナク アイツラダ)

まだ怒りがあるから少女は死なない。

この怒りがついえたら、虚無に呑み込まれたら、幾多の先人と同じくためらいなく少女は死を選択するだろう。

しかしとりあえず今は冬休み。

多くはないが一週間もすればお年玉がもらえる。

年にほんの数回の【期待がそれほど裏切られない機会】

お年玉の存在を思い出して、ようやく少しだけ気が晴れた。

夜空はぼんやりと鉛色。

雪が降り出すのかもしれない。

そして、その空を、何かチカチカする物体がうごめき「Ho! Ho! Ho!」という気味の悪い雄叫びのような声が響き、気がつくといつの間にか目の前にサンタがいた。

「私はサンタだ。見れば分かるよな。泣くな少女。今宵は奇跡の夜。さあ！ 何でもいいから遠慮なく願ってごらん。私がきっと叶えてあげよう」

サンタは満面の笑顔で少女に告げた。

少女は怪訝そうに後ずさりする。

「いやいや逃げることはない。本物本物。ほら赤鼻のトナカイもいるだろ？」

確かにトナカイはいる。

ただしトナカイの鼻は赤くないし鼻息荒いし図体は大きいし八頭もいるし怖い。

しかし、いずれにしても、夢ならいずれ醒めるし、現実なら試してみる価値があるかもしれない。

少女は思い巡らせて、ようやく一番の願い事を思いついた。

「じゃあサンタさん、お願いします。父に父たる威厳を、母に母たる慈愛を、そしてわたしには、これからも生きていくための忍耐力をどうか授けて下さい」

サンタはニッコリ笑って少女にウインクをした。

「それを言うならまず君には子どもらしさだな。私は君の童心を取り戻すプレゼントをたくさん用意しているぞ。さー欲しい物を言ってごらんなさい」

サンタは背負っていた大きな袋を下ろすと、口を開けて中を見せようとした。

「いえ、いらないです」

「え、どうして」

思案する間もなく返事をした少女をサンタは心底不思議そうに見やった。

「わたし、サンタさんに少し幻滅しました。この時代に、子どもにとってこんなにも過酷な世の中に、子どもらしい子どもの生存確率が高いなんて全然思えないし。それと、わたしがゲームとかもったら、学校で虐められることはなくなる？ わたしが文学全集とかもったら、お父さんの仕事が見つかる？」

「うむ、確かに辛い身の上だね。しかしね、だからこそ私はそんな子ども達に夢を持ってもらいたいと思うんだ。知らないかもしれないが、どんな過酷な状況にあっても、決して人間から奪えないものが【夢を見る力】。だから子どもは夢を諦めちゃいけない」

「じゃあ...わたしはずっと自分の夢の中に閉じ籠もってればいいのかな。つまり...引きこもり？ 学校辞めて部屋に閉じ籠もってれば、わたしは幸せになれる？」

サンタは絶句した。

そして慌てて否定する。

「そうじゃなくて、何というか夢は生きるためのスパイスというか、栄養ドリンクみたいな感じで...」

「知ってる。ドーピングって言うんだよね、それ」

サンタは再び絶句し、そして考えた。

言われてみれば逆境下にあって絶望するの方が、人としてより自然な反応なのかもしれない。

そんな境遇の子ども達に夢を与えるというのは何よりも【生き続けさせる】ことが目的。

状況の打開ではなく妥協。

(これが私のして来たこと！)

サンタは声を絞り出して少女に言った。

「...すまん。どうやら私は、古き良き時代の夢を未だ見続けていただけらしい。というか、そもそも【古き良き時代】なんてあったのか。子ども達が幸せで完璧に保護されていた時代なんてあったのか...」

サンタは泣きたくなってきた。

「本当にすまん。いずれにしても私には、君の願いを叶える力はない。そもそも自分にどんな力が備わっているかすら分からなくなってきてしまった」

サンタは偽らざる本心を少女に語った。

いつから変わったんだろう。

そもそも変わったのか？

私が思い込んでいただけなんじゃないのか。

「もういいよ。じゃあ...それが無理ならこれはどう。わたし、生まれる前に戻りたい。そして今度は全力でこの世に誕生することを拒絶したい。生まれてしまったから死ぬのが怖いんだ。だから生まれなければいい。生まれなければわたしは【生まれなかった可哀想な命】で終われるし」

「そんなこと出来ないよ！」

「出来るよ簡単だよ。わたしの首を絞めてもいいし、そのソリに乗せて、大空高く連れて行って、わたしの背中をちょっとだけ押してくればいい。そうすればわたしは【生まれなかった命】と同じになれる。これなら簡単でしょ。わたしだってバカじゃない。無理な願いはもうしな

いよ」

「なんという過酷な願いを！」

サンタはこらえきれなくなりその場に突っ伏して泣き出した。

大きな体を震わせて、おいおいおい泣いた。

(少しいじめすぎたかな)

少女はばつが悪くなった。

サンタの咽び泣きはなかなか収まらず、やがて雪が降り出した。

少女は自分がかけていた毛布を、そっとサンタの肩にかけた。

すると今度は自分が寒くなってきて、部屋に戻って自分用のコートを取ってきた。

やがてサンタは突然体を起こし、その大きな腕で少女を抱きしめた。

「や、やだ！何するの？」

サンタはますます力を込めて少女を抱き寄せた。

「君は優しい子だ。私は心から感心したよ。私は近頃慢心していたんだと思う。みんながはやし立てるから、子どもたちにプレゼントを配ればそれで使命は達成できた気になっていた。何という自惚れだ。私は、君の願いを叶える力を残念ながら持ち合わせていないが、お礼に最高ランクのプレゼントをあげようと思う。君にはその資格がある」

「最高ランク？」

「そう、これだよ」

サンタが袋から取り出したそれは、目が眩むほどに眩しく輝いた。

「これは金塊だ。人間社会において唯一価値が変わらない宝物。これさえあれば自分で運命を切り開いていくことも可能だよ」

「...とにかく、サンタさんは、子どもを喜ばせたくて仕方ないんだね」

「もちろん」

「本当は子どもにそんなもの、あげちゃいけないでしょ」

「よく分かるね。ばれると私は叱責されるかもしれない。だけどいいんだ」

「サンタさんの気持ちは、とてもよく分かった」

少女の言葉を聞いてサンタは安堵した。

「でもいらない」

「え...何故？」

「だってこの後、サンタさんは、わたしを虐めたやつらの家にも行くんでしょ？」

「それは...」

「いじめられっ子を体よく慰めつつ、でもいじめっ子達も祝福する仕事ってどういう気分？」

「.....ごめん」

「残酷だよ。とっても残酷。それが平等の本音。博愛の真実。貧しい子ども達を愛すなんて、よくも知らん顔して言えるね。もういいよ。帰ってよ。こんなプレゼントいらない。結局、夢って【もの】なんだね。ものものもの。もので夢が買えるなら、そんな夢なんか爆発しちゃえばいいんだ。夢が見られたって現実は何も変わらないし。サンタさんがあいつらにもプレゼント配っ

て回るなんて想像したら、もうわたしは辛くて辛くて死んでしまいたくなるよ。その毛布あげる。私からのプレゼント」  
そう言って少女は窓を勢いよく閉じた。

サンタは呆然としてしばらくベランダに立ち尽くした。  
そしてやがて力なく手綱を操りソリを駆って空に飛び立った。  
サンタは肩をふるわせてむせび泣いた。  
(おれは残酷だ。おれは何のため誰のためにこんなことをしているのだ。おれが存在することで何が変わり何が改善するのか)  
トナカイがサンタを慰めるようにくうんと鳴く。  
(というか、おれの存在自体がまやかしか。大人の作り出した都合の良い目くらまし)

サンタは、持参していたプレゼントを捨ててしまおうと思った。  
(こんなものがあるから悪いんだ。こんなものがあるから、子どもに本当は何が必要か分からなくなるんだ)  
そして袋に手をかけ、中身を取り出そうとしたとき、サンタはノートの切れっ端を見つけた。

(汝が為すべきことを為せ)

ノートには子どもっぽい字でそう書かれていた。  
誰が入れた？  
まさかあの少女...

サンタは袋の口をきつく縛った。  
大切なプレゼントがこぼれ落ちないように。  
そして少女からもらった毛布をマントのように首元で結わいて羽織り、姿勢を正して張りのある声でトナカイ達に命じた。  
「時間がない。さあ、張り切って全ての子ども達にプレゼントを配るのだ！」  
サンタの乗ったソリは勢いよく街に向かって急降下を始めた。

「Ho! Ho! Ho!」  
サンタは笑った。  
「Ho! Ho! Ho!」  
世界中にこだまするような大きな声で笑った。

(1)

サンタさんお願いします。過去の過ちを帳消しにする為にどうか時間を戻して下さい。

「それが叶うなら私だって」

そう言ってサンタは倒れ込んだ。

少年はげつが垂くかった

しかしサンタの咽が泣きは収まらず少年は自分のコートを脱いでサンタの肩にそっとかけた。  
綺麗な星の夜だった。

(2)

サンタさんお願いします。父に父たる威厳を、母に母たる慈愛をどうか授けて下さい。

「それを言うからまず君には子どもらしさがか」

サンタさんもそういうこと言うんですか、この時代に、子どもにとってこんなにも過酷なこの世の中に！

「...すまん。私は夢だけを見ていたらしい」

(3)

サンタさんはアの後、僕を虐めた連中のところにも行くんでしょ？

「.....ごめん」

クリスマス・ツリーのてっぺんで

<http://p.booklog.jp/book/40549>

2011/12/12

著者 : onaishigeo

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/onai/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40549>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40549>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.